〔展示等記録〕

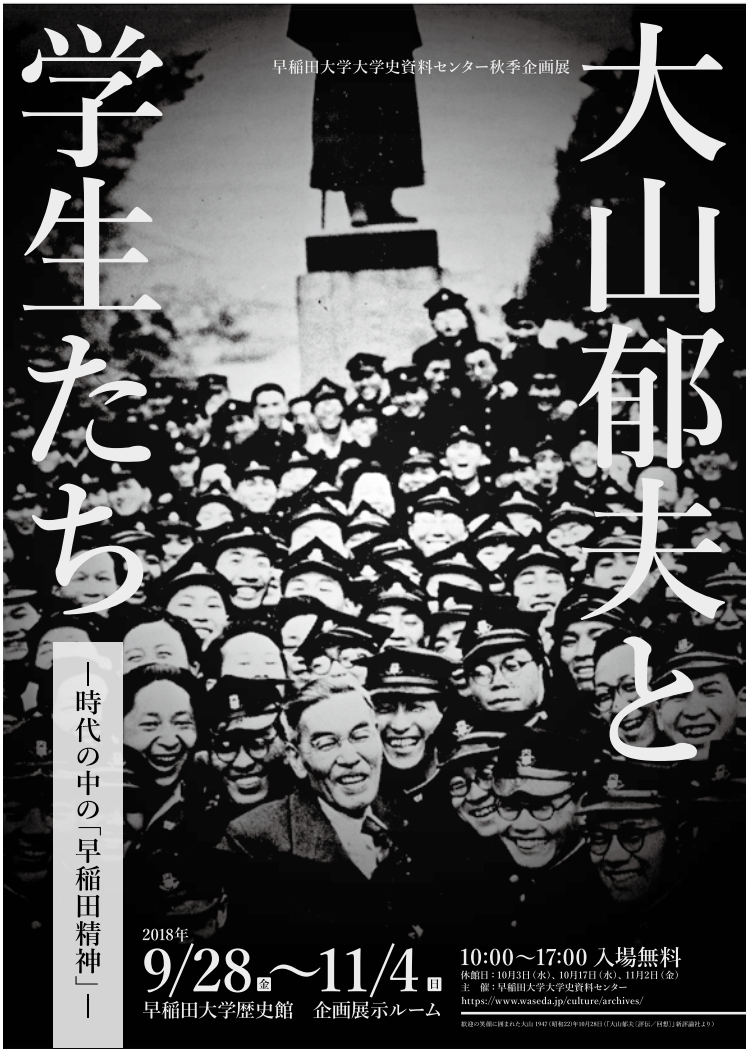
二〇一八年度秋季企画展
「大山郁夫と学生たち――時代の中の「早稲田精神」」

田中智子

二〇一八年度秋季企画展は「大山郁夫と学生たち――時代の中の「早稲田精神」」と題し、本学教授であり社会運動家・政治家であった大山郁夫の足跡と、各時期の早稲田の学生たちの動きに焦点をあてて、展示を行った。

会期は、二〇一八年九月二八日から一一月四日までの約一ヶ月間で、会場は早稲田大学歴史館企画展示ルーム（早稲田キャンパス一号館一階）であった。期間全体で三、〇九一人の来場者数があった。本展示会開催にあたり、ご協力いただいた関係各位・各機関に改めて御礼申し上げる。

以下、主な展示資料を紹介しつつ、本企画展の内容を説明していく。なお、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学大学史資料センターの所蔵資料である。


早稲田大学大学史資料センター秋季企画展
大山郁夫と学生たち
―時代の中の「早稲田精神」―
2018年
9/28(金)～11/4(日)
早稲田大学歴史館　企画展示ルーム
10:00～17:00 入場無料
休館日：10月3日(水)、10月17日(水)、11月2日(金)
主　催：早稲田大学大学史資料センター
https://www.waseda.jp/culture/archives/
歓迎の美酒に酔まれた大山 1947(昭和22)年10月28日(『大山郁夫(評伝／回想)』岩波書店より)

ポスター

はじめに

二〇一八年は大山郁夫が戦後復職してから七〇年目にあたる。大山は東京専門学校・早稲田大学で学生生活を送り、海外留学を経て本学教授に就任した後、社会運動・政治運動をけん引して、「大正デモクラシー」のオピニオンリーダーとなった人物である。

いわゆる「大山事件」で辞職後、一六年間のアメリカ亡命を余儀なくされたが、第二次世界大戦後の一九四七年に帰国した。その際、前頁のポスター写真の通り、大勢の学生たちの歓迎を受けて母校に迎え入れられた。直接の教え子でもない戦後の学生たちが、なぜ大山をこのように歓待したのだろうか。

本展覧会では、その謎を「早稲田精神」をキーワードに、早稲田における大山の足跡と、各時期の学生たちの動きを描き出すことにより紐解いていく。本学の精神が時代の節目の中でどのように語られ、大山をはじめとする教員や学生たちに受け継がれていったかを合わせて見ていただければ幸いである。

1.「早稲田大学」開校時の早稲田と学生・大山（一九〇一～一九〇五年）

大山が在学していた頃の早稲田

一九〇二（明治三五）年九月、東京専門学校は「早稲田大学」へと名称を変更した。一八八二年の東京専門学校開校式の演説において、小野梓が「十数年の後ち漸くこの専門学校を改良前進して、邦語を以て我が子弟を教授する大

学の位置に進め、我邦学問の独立を助くるあらんこと」を望んでから二〇年後のことであった。

「大学」という名称にはなったものの、当時法令で大学と規定されていたのは東京・京都の帝国大学のみであった。一九〇三年の専門学校令によって私立の専門学校も誕生したが、私立専門学校の中には「大学」を自称し、将来的に大学へと昇格することを目指す学校も少なくなかった。「早稲田大学」もその一つであった。

大山郁夫が早稲田に入学したのは一九〇一年、東京専門学校と名乗っていた最後の年であった。大山の所属は政学部英語政治科であったが、翌年には校名・制度変更に伴い早稲田大学大学部政治経済学科へと変わった。このように変化の激しい時期に早稲田に在学していたが、大山は成績が極めて優秀で、一年次・二年次には特待生に選ばれ、次学年の学費を免除されている。

大山に影響を与えた教師たち

大山は、在学中最も影響を受けた教師として浮田和民の名を挙げている。浮田は当時、社会学や西洋史の講義を担当しており、個人的にも交流があった。大山の日本と西欧を相対化して見る視線や、何事も怖れず真理を貫き発信していこうとする姿勢は、浮田から学んだものであるのかもしれない。

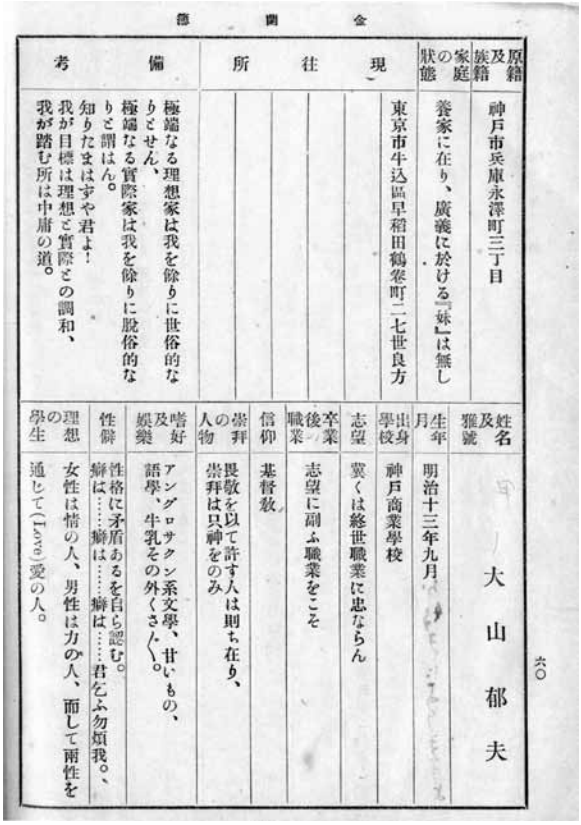
大山は当時学監を務めていた高田早苗のことについても、「社会科学方面にも自然科学方面にも造詣があるという広く豊かな教養のある人物をつくることをそのリベラル・エデュケイションのモットーとされた」と回想している。高田はこの後、大山の教員生活においても密接な関わりを持つことになる。特に、二度の辞職の契機となった事件（早稲田騒動、大山事件）には当事者として関わっている。

また、大山は後年、小野梓からも大きな感化を受けた、と述べたと言われる。小野は一八八六（明治一九）年に亡

くなったため、大山は直接小野から薫陶を受けてはいない。しかし、小野が東京専門学校開校式において提唱した「学問の独立」を大山も主張していることから、小野の影響を強く受けていたと考えられる。

【主な展示資料】

東京専門学校英語政治科一年級特待生学費免除の賞状（一九〇二年七月十五日）



紀念金蘭簿（1905年５月）

大山郁夫「先生の追憶」（『浮田和民先生追懐録』、一九四七年）

大山郁夫卒業論文「産業進化に関する学説の比較」（『早稲田学報』第一二一号、一九〇五年八月）

紀念金蘭簿（一九〇五年五月）

大学部政治経済学科第1回卒業生の卒業記念帳。信仰、崇拝する人物、嗜好・娯楽、性癖などについて、自身の言葉で記している。

早稲田大学大学部政治経済学科特待研究生任命書（一九〇五年七月一五日）

2.「大正デモクラシー」期の早稲田と教員・大山（一九〇六～一九一七年）

明治末―大正期の学生気質と学生研究会

大山が学生時代、そして最初の教員時代を過ごした明治末―大正期の早稲田の学生気質について見ていこう。『最近学校評論』という本は、「其学生気質は大学の組織と共に一変したり。即ち軽佻浮華なるハイカラーの輸入なりとす」（臼田卯一郎、一九〇六年）と述べている。ハイカラーとは西洋風の身なりや生活様式をするさまを表した言葉であるが、「早稲田大学」に名称変更したあたりから、学生たちの雰囲気が変化してきたことが示されている。

また、「早稲田大学評判記」という雑誌記事には、「多いと云へば、会合の多い事も名物に入るかも知らぬ」（『冒険世界』第一巻第三号、一九〇八年）と述べられている。ここでいう「会合」とは今でいうサークル活動のことであり、中でも「学生研究会」と呼ばれる教員・学生の自主的な研究会がこの時期急増し、大学開校時には一〇団体であったのが、一〇年後の一九一二（明治四五／大正元）年には三三団体にまで増加している。

学生研究会には雄弁会、文学会、新聞研究会などがあったが、大山は在学中から英語会に所属し、教員になってからも幹事として関わった。

教員・オピニオンリーダーとしての大山

一九〇六（明治三九）年、特待研究生を終えた大山は高等予科英語教員に就任した。一九一〇年からはアメリカ・

大山の担当科目

年度（西暦／和暦）	担当科目
1906／明治39	英作文
1907／明治40	イーリー経済、英作文、文法・書取 テリー法学通論
1908／明治41	訳読（イーリー経済原論）、英作文
1909／明治42	英訳（イーリー経済原論）、英語（作文、文法） 英作文
1910／明治43	英訳及英文和訳（ヲールド、プログレス） 英語（作文）
1915／大正4	国家学原理、政治学史
1916／大正5	国家学原理、政治学史、政治哲学（原書研究） エコノミツククラシツクス
1917／大正6	国家学原理、政治学史、政治哲学（原書研究） エコノミツククラシツクス（セミナリー） 政治学研究
1922／大正11	国法学、政治学
1923／大正12	国法学、政治学
1924／大正13	政治学研究、政治学、国家学
1925／大正14	政治学研究、政治学、国家学
1926／大正15・昭和元	政治学研究、政治学、国家学
1948／昭和23	政治学研究
1949／昭和24	政治学研究、国際政治
1950／昭和25	国際政治論、政治学研究、国際政治

※「早稲田大学学科配当表」等をもとに作成

ドイツに留学した。アメリカでは政治学・社会学などを、ドイツでは国家学・行政学などを学び、一九一四年年に帰国した。

大山が帰国した一九一〇年代半ばは、「大正デモクラシー」と呼ばれる民主主義・自由主義的な運動・思潮が、政治・社会・文化の各方面で高まりを見せていた時期であった。一九一六年に吉野作造によって民本主義による政治が提唱されたことを背景に、次第に普通選挙運動が活発化していった。

大山は一九一五年に政治経済学科教授に就任すると、教員として国家学・政治学などを教える傍ら、『中央公論』・『新小説』などの雑誌に寄稿するようになった。大山は「大正デモクラシー」のオピニオンリーダーとして、「文化国家主義」や「政治的機会均等主義」を提唱していった。

早稲田騒動と大山

一九一七（大正六）年、早稲田大学維持員会の一部から、天野為之学長の再任に反対して、名誉学長の高田早苗を学長に迎えようとする動きがおこった。これを契機に、学内の教員らは天野派と高田派に二分して対立することとなった。いわゆる早稲田騒動の始まりである。

これに対して、天野派にも高田派にもくみせず、この機に母校改革に乗り出そうとする早稲田出身の少壮教授団が現れた。彼らは恩賜館という建物の三階に研究室を持っていたため、「恩賜館プロテスタンツ」または「恩賜館組」と呼ばれた。大山はそのリーダーであり、他の教授団とともに大学改革案をまとめるとともに、『大学評論』・『大学及大学生』など学外のメディアにも自身の構想を積極的に発信していった。

「恩賜館組」は学生・校友を巻き込まずに、教員のみで改革を行おうとした。しかし、学生たちの間にも運動は拡

がり、演説会を頻繁に開催するなどした。

早稲田騒動は結局、当分学長をおかず、大隈重信総長のもとに理事会をおき校務の処理にあたることにして一応の解決をみた。しかし、理事会は騒動に関わった教授5名の罷免と学生数名の退校処分を決定した。その罷免教授の中に「恩賜館組」の教員が含まれていたことから、「恩賜館組」に最後まで残った大山・村岡典嗣・服部嘉香の三教員も共に辞職することとなった。

【主な展示資料】

〝Women's Education in Japan〟（『早稲田学報』第一二八号、一九〇六年一月）

「勝田友三郎受講ノート」国家学原理・政治学史（一九一五～一七年頃）

大山郁夫「大学生活と思想の自由」（『大学及大学生』創刊号、一九一七年一一月）

「教授大山郁夫、講師村岡典嗣、同服部嘉香三人の辞職理由書」（『早大紛擾秘史』第三冊、一九一四年／早稲田大学図書館蔵）

3．思想統制とゆれる「早稲田精神」（一九一七年～一九二七年）

軍事研究団事件と研究室蹂躙事件

早稲田騒動がおこった一九一七（大正六）年は、第一次世界大戦の真っ只中であり、ロシア革命がおこった年でもある。第一次大戦は日本に好景気をもたらしたものの、急激な資本主義の進展を引き起こし、労使間の対立も次第に

激化していった。そのような中で起きた一九一八年の米騒動は、無産運動を進展させる契機となった。

学内でもこの時期、ロシア革命の影響を受けて社会主義を研究し、それに傾倒する学生が増加した。彼らの中にはただ研究を行うだけではなく、団体を組織し実践運動を行う者もあった。また、第一次大戦の影響から学生たちの間には反軍思想が拡がっていたが、一方で軍事研究を行おうとする学生たちも存在した。

早稲田騒動で辞職した大山はその後、大阪朝日新聞社の社会部論説班の記者となったが、米騒動問題を取材した記事に関する筆禍事件（白虹事件）によって退社した。この頃を境に大山は社会運動に積極的に関わるようになった。一九二一年に早稲田に復職した後は、社会主義研究・運動を行う学生たちの指導を行うようになり、一九二三年にはそれらの学生によって組織された文化同盟の会長に就任している。

そのような中、軍事研究を標榜する早大軍事研究団が結成された。同年五月の発会式の席上では反軍国主義を唱える学生との間で対立が生じた。その後開催された雄弁会主催の軍事研究団撲滅大会では、文化同盟と軍事研究団を支持する学生らによる乱闘が起きている（軍事研究団事件）。

これに対し大山は、学内の教授に呼びかけて事件の対策を協議し、軍事研究団を純粋の学術的研究団体とは認めない、などの声明を発表した。軍事研究団はその直後自ら解散を表明したが、軍事研究団の支持者から文化同盟の解散と大山らの解職が要求され、文化同盟もまた解散に至っている。

軍事研究団事件が収束して間もない一九二三年六月五日、共産党員であった佐野学と猪俣津南雄の研究室が、治安警察法第二八条の嫌疑により警察の捜索を受けるという事件が起こった（研究室蹂躙事件）。これは同日発生した共産党弾圧（第一次共産党事件）と一連の動きであったため、学内のみならず広く学外からも批判の声があがった。

学生たちもこの事件に敏感に反応し、同月二六日には雄弁会主催で大学擁護講演会が開かれ、大山も登壇して「大

学の使命とその社会的意義」という演題で講演を行っている。また、新聞学会（新聞研究会の後身）も『早稲田大学新聞』でこの事件を報道しようとしたが、大学当局の意向により休刊となった。

大山郁夫講演「大学の使命とその社会的意義」（抜粋）

司法官憲の早大研究室臨検事件は、一万の早大の学徒に対する大なる侮辱として、全校の教職員及び学生の血を沸き立たせた。それと同時に、それは大学に於ける研究の自由に対する当局の無理解なる圧迫の上に、一つの新しき由々しき実例を加へたものとして重大視すべき性質のものである。この点から見れば、それは単に一早稲田大学の問題であるばかりでなく、同時に学術の研究を生命とする他の諸大学、及びその他すべての研究団体の問題でもある。

大山事件

軍事研究団事件・研究室蹂躙事件を契機として、「無産階級の解放運動の戦線に一歩進出を試みることを決意した」（「早稲田の学徒に与ふ」）大山は、一九二六（大正一五）年三月に結成された無産政党・労働農民党に入党し、一二月に委員長に就任した。一方学内においては一九二四年、学生研究会である社会科学研究会の会長に就任し、学生たちの指導にあたった。

しかし、大学教授と政党委員長の両立は不可能と考えた、高田総長をはじめとする理事会は、大山の解任決議を行った。政治経済学部教授会もまた、一九二七年一月大山に辞職勧告を行ったが、大山に断られたため、解職を決議した。この理事会・教授会の決議に対し、学生たちは大山留任運動を展開し、一月に大山留任を教授会に訴えるための学

生大会を開催した。大山の辞職が決定的になった二月には、学生有志によって大山の告別演説会が開催された。この時の大山の演説「早稲田の学徒に与ふ」が、雑誌『改造』に掲載されている。

大山が教授辞職を拒んだ理由（「早稲田の学徒に与ふ」より）

私が折角今日まで助力を捧げて来た学生たちが、今後彼等の正当な運動の上に於て如何なる弾圧や迫害を加へられてゐるのを私の眼前に見てゐようとも、私はそれを拱手座視してゐなければならないであらう。だが、それは、私には堪へられないことである。

大山はこの演説の中で「早稲田精神」について多く語っている。「早稲田精神」とは、小野梓ら創立者たちによって提唱されたもので、「『学問の独立、研究の自由、及び学問の活用』によって貫かれ」ているものである。大山はこの「早稲田精神」は最近約十年間の現実世界の激変によって、「旧き早稲田精神」と「新しき早稲田精神」の二つに分裂し、前者は大学当局によって、後者は「主として社会科学の研究に執掌してゐる進歩的青年学徒によって最も典型的に代表されて」いるものであるとし、「沈滞は早稲田精神の死滅を意味する」と「新しき早稲田精神」の担い手である学生たちに語りかけた。

【主な展示資料】

軍事研究団事件に関する教授寄稿論文（大山郁夫／青柳篤恒）（『早稲田大学新聞』第一四号、一九二三年五月一六日／早稲田大学図書館蔵）

臨時休刊を伝える『早稲田大学新聞』号外（「自大正十二年至昭和十三年　赤と白、嵐の足跡」／早稲田大学図書館蔵）

大山郁夫「早稲田の学徒に与ふ」（『改造』第九巻第三号、一九二七年三月）

大山事件掲載の卒業アルバム（「早稲田大学政治経済学部卒業記念帳」、一九二九年）

4．大山事件後の早稲田と大山の亡命（一九二七年～）

学生研究会の解散

大山の告別演説終了後、社会科学研究会の学生を中心に学生自治同盟が結成された。しかし、大学当局は学生自治同盟を無効とし、社会科学研究会会員九人の退学処分を発表した。大学当局がこのように厳しい処分にを行った背景には、一九二五（大正一四）年に制定された治安維持法の影響があったと考えられる。同法は国体変革・私有財産制否定を目的とする結社・運動の取締を目的としていたため、以後、社会主義・共産主義を標榜する学生研究会は当局の取締を受け、解散を命じられた。

告別演説にて大山が危惧した通り、その後社会科学研究会に対する大学当局の圧力は強まり、同年一一月ロシア革命記念講演会を無断開催したことにより、社会科学研究会に解散命令が下っている。早稲田では社会科学研究会の他、新聞学会が一九二八年に、雄弁会が一九二九年に活動停止を余儀なくされている。

大山の亡命

大山事件によって二度目の辞職をした大山は、本格的に労働農民党委員長としての活動に邁進していく。一九二八

（昭和三）年の第一回普通選挙において、労働農民党は全国で無産政党最多の二八万票を獲得し、二名の当選者を出した。しかし、選挙直後の三・一五事件により、共産党活動家が多く出馬していた労農党は結社禁止処分となった。大山は翌年新労農党を創立し再び委員長に就任したものの、一九三一年に全国大衆党・社会民衆党との合同により全国労農大衆党が結党されたことを契機に、「一兵卒」として参加することを宣言した。

委員長職を退いた大山は、世界の諸事情を知り、日本の運動を科学的に研究するため、外遊に出ることにした。一九三二年三月、大勢の人が見送る中、大山は妻とともに半年の予定でアメリカに出発した。しかし、国内に大山暗殺の動きがあったこと、日本の軍国主義化が加速してついに戦争に突入したことから、そのまま一六年の長きにわたってアメリカで亡命生活を送ることとなった。

【主な展示資料】

労農党候補・大山郁夫（ポスター〈複製〉／法政大学大原社会問題研究所蔵）

労働農民党首・大山郁夫（ポスター〈複製〉／法政大学大原社会問題研究所蔵）

5. 大山の帰国と早稲田への復帰（一九四六年～）

帰国促進運動と帰国歓迎会

一九四五（昭和二〇）年の敗戦直後から、占領軍によって民主化政策が進められると同時に、民衆の間からも民主化運動がおこった。大学などの教育機関では学生・生徒たちが「学園民主化運動」を展開していき、軍国主義的教員

の排除、戦時中追放された教員の復職、学生自治会の結成などを求めて運動をおこしていった。

早稲田においてもこの時期、戦時中の軍国主義を一掃し、建学の精神に立ち返ろうとする大隈精神昂揚運動が大学当局主導で行われた。また、学生たちも一九四六年一月に戦後第一回の学生大会を開催し、学生自治委員会の結成、私学復興、戦災校舎の復旧を決議した。

大山の帰国促進運動もそのような動きの中で行われた。一九四六年二月に早稲田大学教員、社会党・共産党関係、労働組合関係の有志によって大山郁夫帰国促進会が結成されると、学内においても学生たちが学生自治委員会の有志を中心に大山郁夫先生帰校促進会が結成された。

大山郁夫先生帰校促進会は同年六月、大山郁夫帰校促進大会を開催したほか、アメリカにいる大山と手紙のやり取りを行うなど、大山の帰国・帰校に向けての準備を行った。大山に会ったことすらない戦後の学生たちが、なぜ大山を帰校させるために動いたのか――その理由は、戦前期に大山の教えを受けた早稲田の教員たちが、学生たちに大山のことを語っていたためである。戦後間もない頃から学園民主化や反軍国主義の運動を行っていた学生たちにとって、反軍国主義者であり、「大正デモクラシー」のオピニオンリーダーであった大山は、まさに憧れの的だったのである。

こうした学内外の運動の甲斐あって、一九四七（昭和二二）年一〇月、大山は無事帰国を果たした。同月二八日には大学と学生自治会の共催により帰国歓迎会が開催されている。会場となった大隈講堂は学生たちで埋め尽くされ、中に入れなかった学生たちも多数存在した。

教授復帰後の大山と学生

大山が帰国して間もない一九四七（昭和二二）年一〇月三一日、政治経済学部は正式に教授復帰を要請し、大山もこれを快諾した。翌年四月に二度目の復職をした大山は、教授として教育・研究を行う一方、学内外で講演活動を行うなど多忙な日々を過ごした。また、一九五〇年には参議院議員選挙に当選し、政治家と大学教授の両立を果たしている。

このような大山に対し、学生たちはどのような印象を抱いていたのであろうか。一九四九年六月に『早稲田大学新聞』が二千人の学生を対象に行った世論調査によれば、大山が次期総長になることを希望する意見が六四％を占めた。復職してから一年以上が経過してもなお、学生たちの大山に対する期待と憧れが依然として強かったことを示している。

一九五〇年、教育機関にレッドパージの動きが起こると、学生たちは大山を始めとする「進歩的教授」を守るための運動を起こす（一九五〇年早大事件）。大山もまた、病身にありながら、一九五〇年早大事件で逮捕・起訴された学生たちの特別弁護人として法廷に立っている。

大山郁夫講演「私学の恩人大隈老侯」要旨（『早稲田大学新聞』復刊六四号より抜粋）

大隈老侯が反動的な時の官憲による不当な弾圧にも断乎屈せず、常に進歩的立場に立って腐敗した藩閥政府に果敢に戦いを挑んでいった政治精神と、明治十五年、国家権力から学問の独立と研究の自由を守るために早稲田大学の前身である東京専門学校を創設した早稲田建学の精神――この二つの精神は現在に至るまで学園の中に脈々として生きている。

【主な展示資料】

市村今朝蔵「大山郁夫先生の人と学問」（『早稲田大学新聞』復刊第六号、一九四六年五月一五日／早稲田大学図書館蔵）
早稲田大学学生自治会「決議」（一九四七年一〇月二八日）
早稲田大学政治経済学部代表「歓迎之辞」（一九四七年一〇月二八日）
早稲田大学大山郁夫先生帰校促進会「メッセージ」（一九四七年一〇月二八日）
早稲田大学教授嘱任状（一九四八年四月一日）
第一回大隈記念祭御案内（一九四九年五月）
レッド・パージに反対する学生自治会ビラ（一九五〇年）

6．エピローグ　―現代に生き続ける大山―

大山は一九五五（昭和三〇）年、七五歳で死去した。帰国からわずか八年後のことである。しかし、この間にも、そして大山の死後も、大山の業績をまとめ後世に伝えようとする動きがおこった。

まず帰国に先立つ一九四六年、戦後復活していた早稲田大学新聞学会の学生たちの手によって『大山郁夫全集』の編纂が始まり、一九四九年までに全五巻を中央公論社より刊行した。また一九八七～八八年にかけて、本学現代政治経済研究所大山郁夫研究グループによって『大山郁夫著作集』（全七巻、岩波書店）が編集・刊行されている。いずれも、大正・昭和戦前期にかけての大山の著作をまとめたもので、大山の政治理論や思想を、その背景にある時代状況とともに後世に伝えようとするものである。

この他にも、大山と親交のあった人々や教え子らによって、伝記や回想録が多数刊行されている。大山自身は自叙伝を書いていないが、これらによって大山の人間的側面も知ることができる。

また、一九八八年には大山の次男・聰氏より、現代政治経済研究所に大山の遺品資料一六六二点が寄贈され、これによってさらに大山研究が進展した。それらの遺品資料は二〇一四年に大学史資料センターに移管され、その一部が本展覧会にも出品されている。

これらの貴重な資料および著作により、大山の業績は死後六〇年以上経った現在でも生き続けているのである。

※大山の遺品資料（大山郁夫関係資料）は、「早稲田大学文化資源データベース」（https://archive.waseda.jp/archive/）で検索・画像閲覧することができる。

※本展示の図録は、大学史資料センターのウェブサイトにて閲覧が可能である。ウェブサイトのＵＲＬは左の通り。

https://www.waseda.jp/culture/archives/